
私が優しい思い出に変わるまで

金城 ユウ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

私が優しい思い出に変わるまで

【コード】

N2635C

【作者名】

金城 ヨウ

【あらすじ】

交通事故で死んだはずの私（宮本夏樹）は、なぜか婚約者の早瀬修一のそばにいて・・・

私が優しい思い出に変わるまで

死が二人を分かつ時

【夏樹】

私は、宮本夏樹二十五歳。

いきなりですが、私は死んでしまったらしい。

目の前では、私の葬式が行われています。

涙を、堪えるお父さんに、涙を堪えることのできないお母さんと
双子の妹の夏海。そして、毅然とした態度で立っている婚約者の早瀬修一。

婚約者の葬儀に、涙のひとつ見せてくれてもと思つたが、彼は人前で弱みを見せる人ではないと思ひ当たる。

「来月には結婚……」

「飲酒運転の車が……」

参列者たちの話を聞くと、私は飲酒運転の車に轢かれたらしい……らしいというのは、事故の前後の記憶があいまいだからだ。修一の部屋を、一人で出たことは覚えているのだけど……

しかし、そんなことより問題なのは、車に轢かれたという事実。私の身体が、無傷という訳にはいかないよね？

嫌だなあ。せめて顔に傷が無ければ良いと切に願う。

最後に見せる顔に傷があるのは、悲しすぎる。

修一の傍らに立つ。修一は毅然として立っているが、その両手は握り締められたまま開かれることはない。見ている、かなりの力が入っているのが分かる。

「修一……」

話しかけてみるが、彼に私の言葉が届くことはない。

修一は自分を責めているだろう。いつもは駅まで送ってくれる修一が、あの日だけは私を送ることができなかつたのだから……

「修一……」

もう一度、話しかける。でも反応はない。

「自分を責めないで・・・」
私の声は、もう届かない。自分が死んだという事よりも、その事の方が悲しかった。

【修一】

額にひんやりとした感触。とても心地いい。俺はゆっくりと目を開いた。すると、婚約者で同僚の宮本夏樹が、手を俺の額に当てていた。

「ごめん。起こしちゃった？」

「来ていたのか。来なくていいと言ったのに」

夏樹は、冷えた水の入ったコップを差し出しながら笑った。

「病人を放っておけないでしょう」

その声を聞きながら、コップの水を一気に飲み干す。冷たい水が荒れたのどを癒してくれるようだ。

「病人といっても風邪だし。寝てれば直るよ。それよりも、うつしてしまっほうが申し訳ない」

「好きでやっているのだから、気にしないで。食欲はある？」

「あまりない・・・」

「それじゃ、お粥でいい？」

「任せるよ。それよりごめん。もう少し寝る」

「うん。できたら起こすから、ゆっくり寝てて」

キッチンに向かう夏樹の後ろ姿を見送りながら、こっぴつのもいないと、小さな幸せに浸っていた。

翌朝には、風邪はすっかり良くなっていた。

昨夜は、夏樹の帰り際に、送っていくと言つと、「なに言っているの馬鹿」と一喝されたが、顔はうれしそうだった。それ以外は、夏樹の献身的な看病に感謝だ。風邪をうつしてなければ良いけど。

とりあえずは、感謝のメールでも送っておくかと、携帯電話を手
に取ると同時に夏樹が好きという曲を設定した着うたが鳴った。

電話の相手は宮本夏海^{みやもとなつみ}。夏樹の双子の妹だ。因みに彼女も部署こ
そは違うが、同期入社と同僚だ。

「おはよう夏海。朝からどうした。仕事のことか？」

「修……」

今にも泣き出しそうな声に、少しだけ慌てる。

「いったいどうした？」

「落ち着いて聞いてね。お姉ちゃんが……お姉ちゃんが……」

ここまで言っつて、携帯からは夏海の嗚咽しか聞こえなくなる。

「夏海。どうした？夏樹に何かあったのか？夏海、答えてくれ」

次の夏海の一言は、俺を驚愕させるには十分だった。

「交通事故で……死んだの……」

死が二人を分かつ時（後書き）

途中で放り投げてある未完の小説を投稿して仕上げるつもりだったので、なぜか新作のプロット作っていて、しかも第一話まで書いてるし・・・ww

第一話と同じらしいのページ数で2、3話の予定ですので、良かったらお付き合いお願いします。

ただし苦手なジャンルになりますので、感想ご指摘がありましたらよろしくお願いします。善処させていただきます。

私が優しい思い出に変わるまで

近くて遠い距離

【夏樹】

初めて会ったのは、新人研修で同じ班になったことがきっかけだった。

ぶっきらぼうな口調で「早瀬修一^{はやせしゅういち}。よろしく」とだけ、面白くもなさそうに言った。

私も夏海^{なつみ}も同じ班だったのだけど、夏海に「怖そうな人…」と第一印象を耳打ちした覚えがある。

実際の修一は、細かいところに気が付き、私たちのフォローも良くしてくれた。後日、修一にそのことを話したところ、「人見知りするんだよ」と恥ずかしそうに話してくれた。

私はどうやら、修一に取り付いているみたいだった。

修一から10m以上離れることができないので、間違いないのだろっ。

私の葬式からすでに3日ほど経っている。

私の目の前では、修一が死んだように眠っている。その周りには、酒瓶や缶ビールの空き缶が、足の踏み場がないほど転がっている。

「修一……」

私の呟きが聞こえたわけではないのだろうが、修一がムクリと起き上がった。そして、すぐそばにあった焼酎の瓶を手にすると、中身を一気に飲み干す。

焼酎が空になると、部屋の隅に空き瓶を放り投げ、今度は、日本酒の一升瓶に手を伸ばす。

「もうやめてよ！修一、もうやめて！やめてよ… や…め…て…よ。ねえ…しゅ…う…い…ち…」

もう何度目になるだろうか？5回や10回ではすまない制止の声

私が優しい思い出に変わるまで

を上げるが、私の声はどうしても届かない。

修一は、この3日間この調子だ。葬式の後には、大量の酒を注文したかと思うと手当たり次第に飲み干していく。飲んでは飲みつぶれて意識を失うように眠り、目が覚めると、つぶれるまでひたすら飲み続ける。その繰り返し…

私はただ見ていることしかできない。壊れていく修一を……ただ、見ていることしか…

そんな私の前で、修一が自虐的に冷笑を漏らした。

「この悲しみで、夏樹なつきのところに逝けたら良いのに…」

そうつぶやくと、修一は倒れるようにして寝てしまった。

ねえ、修一。こんなの嫌だよ。修一がそうしているのを見るのが一番つらいよ。修一。

涙があふれる。私は眠る修一のそばで泣き続けた。

【修一】

霊安室の扉を開いた。中には夏海が一人座っていた。

「修一」

夏海が振り返る。能面のように無表情な夏海。

部屋に入ろうとするが、足が動かない。夏樹がそこにいる、たった数m。その数mが果てしなく長い。

「飲酒運転の車に轢かれたって…」

「あ、ああ」

夏海に返事するが、やはり足が動かない。自分の右手で自分の右頬を打つ。

「修一！」

「大丈夫、大丈夫だ、夏海」

俺の様子を見て、イスから立ち上がった夏海を手で制す。俺はゆ

つくりと霊安室に踏み込む。そして白い布をかけられた夏樹の横に立つ。白い布をめくるにも精神力を振り絞る必要があった。夏樹の顔には、まったく傷はなかった。昨夜、別れた時の姿とまったく変わらない。まるで寝ているようで、今にも目を開いて「冗談よ」って言うってくれそうで。

俺はいつまでも夏樹を見つめ続けた。

のどが渴いて目が覚める。ヒリヒリとしてのども痛い。

その辺に酒が転がっているはずだ。手探りで探すが手には何も触れない。

アルコールのせいで、うまく力が入らない身体を起こすと、部屋の中に酒瓶や空き缶、まだまだあるはずの酒はきれいさっぱり消えていて、部屋はいつものように片付けられている。

夢？そんなわけはない、酔っ払っていてもその辺の記憶は鮮明だった。それに喪服も着たままだ。もし、夢だとして、どこまでが夢だろうか。

一旦起こした身体を、再度ベッドに沈める。

頭の中がぐちゃぐちゃして考えがまとまらない。考えることさえ億劫だ。

「夏樹…」

会いたい人の名をつぶやく。そのとたん空腹で腹が鳴った。

「悲しくても、腹は減るんだなあ…」

苦笑する。しかし空腹はともかく、のどの渇きだけは我慢できないほど強くなっていた。

俺はふらつく身体を支えながらキッチンに向かった。しかしそこで見たのは、俺に背を向けなにより料理をしている女性の姿。

「夏樹！」

俺は思わず、死んだはずの女性ひとの名前を叫んでいた。

近くて遠い距離（後書き）

第二話投入です。

プロットは無事完成しましたが、本文を埋めるのに悪戦苦闘中です。ファンタジー系を書いていると、キャラが勝手に動き出すことが多いので書きやすいのですが、この話はキャラが動いてくれません。どうしよう…

私が優しい思い出に変わるまで

慟哭　そして…

【夏樹】

修一に告白されたのは、去年のクリスマスの前だった。

入社以来、私と夏海、修一の三人でよく遊びに行ったり、いつのまにかお互いを呼ぶときも呼び捨てになっていた。そんな関係が数年続いていた。

修一の告白はすぐくうれしかったが、私は即答できなかった。私自身修一に好意を抱いていた。ただ夏海も修一のことが好きだということを知っていたから…

でも、戸惑う私の背中を押してくれたのは夏海だった。でも、「お姉ちゃんって、馬鹿？」はないと思う。

「夏樹！」

修一が私を呼ぶ声が聞こえた。だがそこにいるのは私ではない。

修一は振り向いた女性を見て目をそらした。

「夏海か…」

「夏海かはないでしょ。心配して様子を見に来たのに」

修一は無言で冷蔵庫をあけ、缶ビールを取り出すと一気に飲み干す。

「ちよつとやめなさいよ。いくらなんでも飲みすぎだよ」

「それより、どうやって部屋に入った？」

夏樹がテーブルの上を指差す。それは私が修一かもらった合鍵。「それよりも、あの部屋の様子じゃ、お酒ばかりで何も食べてないでしょ。もうすぐ出来上がるから食べてよ」

ガスコンロの上には、鍋がかけてあって、おいしそうなおいがする。夏海の十八番のクリームシチューだ。

「鍵、置いて帰れよ。俺のことは放っておいてくれ」

そう言うと、修一は残りのビールを煽った。

「なら、無茶な飲み方はやめて」

修一が、新たに開けようとしたビールを夏海が奪い取る。

「なにすんだよ」

修一が夏海に詰め寄り、ビールを奪い取ろうとしてもみ合う。

「なによ。おねえちゃんがいなくなって悲しいのは修一だけじゃないのよ」

「うるさい。うるさい。うるさい」

いつの間にか、修一が夏海を床に押し倒し押さえつけていた。

「そいつ渡して、帰れ」

「嫌！」

「いい加減にしろ、犯すぞ。」

修一が、夏海のブラウスを乱暴に引っ張ると、ブラウスのボタンが簡単にはじけとんだ。

その瞬間、私は叫んでいた、届かない声を張り上げて。

「修一！もうやめて！もう何も届かないの？ 私の声も、夏海の想いも、なににも届かないの？ ねえ、修一！」

【修一】

夏樹の葬式まで、いや、葬式の後も涙さえ出なかった。こんなに悲しいのに、とても苦しいのに。

病院で、夏樹の死に顔を見てからの記憶も曖昧でまるで夢のよう
で…

思い出すのは、夏樹の笑顔だけで…

でも、でも、こんなに苦しくて、悲しくて、辛くて…

夏樹…

夏海は抵抗しなかった。ただ目を閉じてそのまま…

「なぜ、抵抗しない。簡単に振りほどけるだろうが…」

夏海を押さえつけけるのに、さほど力をこめてはいない。その気になれば簡単に振りほどけるはずだ。

「簡単に逃げられるだろう？ 逃げろよ」

「私が逃げたら、修一はどうするつもりなの？」

質問に質問で返す夏海。

「また酔いつぶれるまで、お酒飲むの？」

そのつもりだったが、答えることができなかった。そのままの姿勢でお互いに無言。

どのくらい時間が経っただろうか、5分以上経った気もするが、ほんの数秒の気もする。先に口を開いたのは夏海だった。

「良いよ。それで修一が楽になるなら… いつもの修一に戻ってくれるなら… 好きにしても良いよ」

夏海は、目を閉じたまま動かない。本気で抵抗しないつもりだ。

俺はただそんな夏海を見つめていた。そして、その目の端に光るものを見つける。

「馬鹿野郎。じゃあ、なぜ泣いてる？ 俺なんかの為に、嫌なことをするな。放つて置けば良いのに…」

指で、夏海の涙を拭ってやる。

「嫌じゃない。嫌じゃないよ。修一が、私やお姉ちゃんが好きだった修一に戻ってくれるなら、嫌じゃないよ…」

「強情だな。でも、こんなのは嫌だろう？ こんな無理矢理…」

夏海から手を離し、そのすぐそばに座り込む。

「修一？」

「ごめんな。俺、夏樹にも夏海にも、ひどい事してるな。俺の傍で笑っていて欲しかっただけに…」

背後から抱きしめられた。背中越しに夏海の体温を感じる。何か知らないが安心できる暖かさを感じた。

私が優しい思い出に変わるまで

「ごめんね、修一。私が甘えてしまったから、私を励ましてくれたから、修一は苦しいままだったのよね。ごめんなさい修一」

不意に涙がこみ上げてきた。

「夏樹…なぜ、なぜお前なんだよ… 夏樹いい…」

声を上げて激しく泣く俺を、夏海はずっと抱きしめていてくれた。

慟哭 そして…（後書き）

仕事が忙しくて更新遅れました。

次回も、早くて来週末ごろになりそうです。

しかし、この小説はキャラが本当に動いてくれない。内容の割には執筆に時間が…

タイトルの「慟哭 そして…」は、良いのが浮かばなかったので、昔の同名ゲームからのパクリですww（仮タイトルは「慟哭」でした）

ゲームとは、内容がぜんぜん違いますけどね。

よろしければ、またお付き合ってください。

また、アドバイス、ご意見がありましたらお願いします。

Last Kiss (ラストキス)

【修一】

もうすぐ一年。君がいなくなっただけから一年。

あの頃、君と俺と夏海と三人で通ったバーの扉の前に来ている。

ここにくるのも、約一年ぶり…

大きく重い扉を押して店内に入ると、外の喧騒から隔絶される。

外とは異空間だ。

「いらつしゃいませ、早瀬様」

顔なじみのバーテンダーが声を掛ける。一年も後無沙汰しても、

覚えていてくれたらしい。

「久しぶり。今日は待ち合わせなんだ」

「左様でございますか。ではこちらの席へどうぞ」

案内してくれたのは、よく三人で飲んだ席だった。

真ん中に俺、右側に夏樹、左側に夏海というのがいつもの席順だ

った。いつも座っていた席に座る。

「何か、ご注文いたしますか？」

「そうだね…」

少し考えて答えた。

「ホワイトラム45ml、ブランデー10ml、レモンジュース5

mlを、シェイクで」

「かしこまりました」

三人でよく来たときのことを思い出していた。最後に来たのは夏

樹からプロポーズの返事をもらった時だった。

「お待たせしました」

バーテンダーが二杯のグラスをカウンターに置く。一つは俺の目

の前に、もう一つは、いつも夏樹が座っていた席に。

「こちらは、私共からのサービスでございます」

夏海は、夏樹の死後もここに顔を出していたみたいだから、夏海

から聞いていたのだろう。

「ありがとう」

待ち人が来たのは、ちょうどグラスを空にした頃だった。

「夏海、こっちだ」

夏海は当然のように、俺の左側の席に座る。

「修一からの誘いなんて珍しいね」

「ちよつとな。注文は任せてもらってもいいか？」

夏海が、俺のほうを見て微笑んだ。

「うん。任せる」

「バーテンダーさん、同じものを彼女にも」

目の前に置かれたグラスに、夏海はゆっくりと口をつける。

「辛口だけど、おいしい」

「そうか、よかった」

「ねえ、なんて名前のカクテル？」

「ラストキッス……最後の別れのキス……」

夏海が、俺の顔を覗き込む。

「そろそろ一年経つ。長かったのか短かったのかわからないけど、夏樹には区切りがつけられそうだ」

夏海に笑いかけると、夏海は安堵したような表情をする。

「それからもうひとつ。区切りはつけられても、夏樹のことは一生忘れられないだろう。それでもいいのか？」

あの日の夜、夏海は俺ことを好きだと言ってくれた。待っているとも。

だが、夏海を夏樹の代わりにしてしまうのでないかとの不安もあって、答えられずにいた。あの夜から、そのことをずっと自分に問いかけてきた気がする。

「それでもいいよ。だって、お姉ちゃんは、私にとっても大事な人だったのよ」

夏海の頬を涙が伝った。

俺は、無言で夏海の肩を抱き寄せた。

【夏樹】

初夏、事故から二年経った、私のお墓の前。

修一と夏海の二人が、並んで手を合わせている。

「夏樹、ごめん。夏海と結婚することにした」

「うん、知っている。ずっと見てきたから…」

ずっと、修一のそばで見してきた。修一の悲しみも、苦しみも、苦悩も、すべて…

「もう自由になっていいのよ。修一」

もう届かない声…

「まだ、貴方のことが好き。愛している」

もう届かない想い…

「だから、夏海と幸せになって…」

あの頃のように、修一の傍らに立つ。そして、もう触れ合うことのないキス…

私のラストキス…別れの最後のキス…

修一と夏海の後ろ姿を見送る。私が修一から離れることのできる10m。修一が振り返った。

「ありがとう、夏樹」

「うん。ありがとう、修一」

再び歩き出した二人の姿が、見えなくなる。

嫌になるくらいに青空の下に、私は一人…

不意に誰かに呼ばれたような気がした。あの青空の向こうから…

そうだね。もういかなきゃ。修一も夏海も大丈夫。二人一緒なら

大丈夫…

私は、声に導かれるように青空を目指した。

Last Kiss (ラストキス) (後書き)

最後まで、お付き合いありがとうございました。
そんなあなたに感謝です。

ラストキス(最後の別れのキス)は実在するカクテルです。(レシピは作中にあり)

元々、最終話は「ラストキス」をキーワードに書こうと決めていたのですが、いかがでしたでしょうか？

苦手なジャンルのこともあり、難産だったんですよ。この話…

宜しければ、一言でも良いので、ご感想お待ちしています。
もちろん、厳しい批評もお待ちしています。

私が優しい思い出に変わるまで

私が優しい思い出に変わるまで

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2635c/>

私が優しい思い出に変わるまで

2009年3月24日09時48分発行